

薬学生におけるアレルギー児童キャンプ体験学習の
参加報告および教育的効果の検討
—第43回 ふくおか病院サマーキャンプ—

第一薬科大学 臨床薬学講座 1) 社会薬学分野, 2) 実務実習教育センター

小武家 優子¹⁾, 高橋 沙季¹⁾, 入江 良賢¹⁾, 木村 光太郎¹⁾,
大光 正男^{1), 2)}, 吉武 毅人¹⁾

**Effect of Pharmaceutical education on Undergraduate Pharmacy Students of
Experience learning to a Summer Camp for Children with Allergy
—the 43th National Hospital Organization Fukuoka Hospital Summer Camp—**

¹⁾Laboratory of Social Pharmacy, ²⁾Center for Education of Clinical Pharmacy,
Department of Clinical Pharmacy, Daiichi University of Pharmacy,
22-1, Tamagawa-machi, Minami-ku, Fukuoka, 815-8511, Japan

Yuko KOBUKE¹⁾, Saki TAKAHASHI¹⁾, Ryoken IRIE¹⁾, Kotaro KIMURA¹⁾,
Masao OHMITSU^{1, 2)}, Taketo YOSHITAKE¹⁾

Corresponding Author

Tel: 092-541-0161. Fax: 092-553-5698. E-mail: y-kobuke@daiichi-cps.ac.jp

Abstract

The 43th National Hospital Organization Fukuoka Hospital Summer Camp was held in 2013. Pharmacy students of Daiichi University of Pharmacy participated in this camp as student volunteers.

The purpose of this study is to report on this camp and to clarify effect of pharmaceutical education on undergraduate pharmacy students of experience learning to this camp.

Questionnaire survey for pharmacy students was carried out. The survey included questions about knowledge of childhood allergy, mastery of basic techniques for therapy and examination, learning of basic medical behavior, understanding of childhood growth and development, cooperative attitude of medical staff in general treatment with the patient and the patient's family, motivation for a lecture in university or clinical practice, and free description.

We compared the percentage of understanding “Yes” in self-assessment of each survey item (%) of pharmacy students in this survey with those of medical/nurse students in previous study. It was found that pharmacy students obtained generally high self-assessment of each survey item.

In conclusion, it was suggested that this camp was useful for exposing undergraduate pharmacy students as well as medical/nurse students to children with allergy.

Keywords—summer camp; allergy; experience learning; pharmacy student; pharmaceutical education

諸言

アレルギー児童にとって、アレルギー疾患に対するキャンプ療法の意義は、知識を得る効果(教育的効果)、集団生活を送ることによって体験を得る効果(体験的效果)、病院や家庭では把握できない問題点を見つけ、その解決方法を検討できる効果がある¹⁾といわれている。

キャンプ療法の意義と目的として、①教育的効果(1) ぜん息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎などにおけるアレルギー反応の具体的対処、2) 吸入や内服、外用薬などの日常生活の習慣づけ、3) ぜん息に対するトレーニング療法)、②体験的效果(1) 仲間意識の成立(孤立感からの開放)、2) 自我確立のきっかけ(依存傾向からの脱却)、3) 自発性、積極性の回復(日常生活への自信))、③医学研究的效果(1) 行動や心理の観察、2) 情報の収集)があげられる¹⁾ [図1]。

キャンプ療法の目的と意義

- **教育的効果**
 - 1) ぜん息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎などにおけるアレルギー反応の具体的対処
 - 2) 吸入や内服、外用薬などの日常生活の習慣づけ
 - 3) ぜん息に対するトレーニング療法
- **体験的效果**
 - 1) 仲間意識の成立(孤立感からの開放)
 - 2) 自我確立のきっかけ(依存傾向からの脱却)
 - 3) 自発性、積極性の回復(日常生活への自信)
- **医学研究的效果**
 - 1) 行動や心理の観察
 - 2) 情報の収集

(第43回 ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり)

図1 キャンプ療法の目的と意義

先行研究においては、喘息児サマーキャンプに参加した臨床実習前の医学生・看護学生は、その体験学習によって患児・家族を中心においた小児医療の理解のみならず、それに対する基本的な姿勢や考え方も深められた報告がある²⁾。しかしながら、実務実習中の薬学生におけるサマーキャンプ体験学習による教育的効果を検討したものは、まだない。

本研究においては、①アレルギー児童対象サマーキャンプの学生リーダー(学生ボランティア)〔資料1〕としての参加報告を行うこと、②「実務実習中の薬学生におけるサマーキャンプ体験後の自己評価としてのアンケート調査」を行い、サマーキャンプ体験学習による教育的効果を検討することを目的とした。

方法

対象は、第43回ふくおか病院サマーキャンプ(独立行政法人国立病院機構福岡病院主催)の学生リーダー(学生ボランティア)26名のうち、実務実習中の薬学部5年2名である。なお実務実習Ⅰ期として、学生Aは薬局実習、学生Bは病院実習(特定機能病院)を終え、実務実習Ⅱ期前の夏休みに、サマーキャンプに参加した。

方法①「サマーキャンプ報告」として、学生リーダーの所属、目的別カリキュラムのうち、担当したカリキュラムの活動写真(アレルギー教室、トレーニング、腹式呼吸、ピークフロー&グラフ¹⁾)、について報告する。

方法②「アンケート調査」として、先行研究²⁾を、一部改変して、「キャンプ後の自己評価」について、自記式質問紙〔図2〕によるアンケート調査を実施した。

調査項目は、喘息を中心に、①小児喘息の基本的知識、②検査、治療における基本的技能の習得、③基本的態度の学習、④成長発達の理解、⑤患児とその家族を含めた包括的医療における医療チーム活動の協調的態度、⑥大学講義や実務実習へのモチベーション、⑦自由記述、についてである。

評価については、各調査項目ごとに、理解の有無について自己評価を行い、理解有の割合(%)で、示した。

各調査項目の自己評価における理解有の割合(%)について、本調査の「実務実習中の薬学生(N=2)」と先行研究の「臨床実習前の医学生・看護学生(N=24)」とを比較した。

ID: _____

薬学生におけるアレルギー児童キャンプ体験学習についてのアンケート

第43回ふくおか病院サマーキャンプに参加した薬学生の皆様へ
卒論の調査研究である「薬学生におけるアレルギー児童キャンプ体験学習」についてのアンケートへのご協力をよろしくお願ひいたします。

第一薬科大学 6年 高橋 沙季、入江 良賢

評価については、各調査項目ごとに、「理解ありであれば、○」、「理解なしであれば、×」として、理解の有無について自己評価を行って下さい。

- ①小児喘息の基本的知識について
鍛錬療法的重要性を理解できた。()
喘息慢性管理の大切さが分かった。()
腹式呼吸の重要性を認識した。()
環境整備の重要性が分かった。()
喘息の心理面の治療の大切さが分かった。()
ピークフローメーターを使用することの意義が理解できた。()
- ②検査、治療における基本的技能の習得について
患児の吸入療法の時間的大変さを知った。()
治療をする上で家族の協力の大切さが分かった。()
実際の治療器具をみる事ができた。()
吸入器の種類が多さを知ることができた。()
吸入方法習得の指導の難しさを知った。()
スプレーサ使用法の指導の難しさを知った。()

1

- ③基本的態度の学習について
患児、その母親、医療スタッフと接することで病児全体の体験学習が有意義であった。()
思いやりのある医療の大切さを実感できた。()
医療現場の大変さを知ると同時に医療のやりがいを感じた。()
治療をする上で患児の母親との会話が重要であることが分かった。()
患児との信頼関係の構築が必要であることを感じた。()
- ④成長発達を理解について
喘息児の前に1人の子供であることを認識できた。()
患児との接し方を学ぶことができた。()
患児と接する不安が解消した。()
学童の成長発達における年齢差を感じた。()
- ⑤患児とその家族を含めた包括的医療における医療チーム活動の協調的態度的について
患児を取り巻く医療スタッフとの連携の重要性が分かった。()
教師、友達などの啓蒙の必要性を感じた。()
- ⑥大学講義や実務実習へのモチベーションについて
大学講義や実務実習へのモチベーションが向上した。()
- ⑦自由記述(サマーキャンプに参加して学んだこと、感想等を自由に述べて下さい。)

2

図2 自記式質問紙

結果

1 「サマーキャンプ報告」

1) 第43回ふくおか病院サマーキャンプの概要〔図3〕

第43回 ふくおか病院サマーキャンプの概要は、期間は、平成25年8月20日(火)～8月23日(金)の3泊4日、場所は、佐賀県波戸岬少年自然の家、参加人数は、125名(男:62名、女:63名)であった〔図3〕。参加人数の内訳は、アレルギー児童55名(男:41名、女:14名)、病院スタッフ23名(男:9名、女14名)〔医師7名、看護師10名(AE3名)、薬剤師2名、管理栄養士1名 他〕、学生リーダー(学生ボランティア)26名(男:8名、女:18名)、研修生10名(男:2名、女:8名)〔看護師5名、保健師1名、他〕、医療ボランティア11名(男:2名、女:9名)〔医師1名、看護師8名(AE5名)、薬剤師1名(AE)、管理栄養士1名〕であった。ここで、小児アレルギーエドゥケーターを(AE)と表記した。「小児アレルギーエドゥケーター」とは、日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会認定による制度であり、小児のアレルギー疾患を総合的にとらえ、患者教育を担うことができる専任のメディカルスタッフの養成として開始されており、受講資格は看護師以外にも管理栄養士と薬剤師が加わっている³⁾。

第43回 ふくおか病院サマーキャンプの概要	
・ 期間	:平成25年8月20日(火)～8月23日(金)
・ 場所	:佐賀県波戸岬少年自然の家
・ 参加人員:125名(男:62名、女:63名)	
> 児童	55名(男:41名、女:14名)
> 病院スタッフ	23名(男:9名、女14名) 〔医師7名、看護師10名(AE3名)、薬剤師2名、管理栄養士1名 他〕
> 学生リーダー(学生ボランティア)	26名(男:8名、女:18名)
> 研修生	10名(男:2名、女:8名) 〔看護師5名、保健師1名、他〕
> 医療ボランティア	11名(男:2名、女:9名) 〔医師1名、看護師8名(AE5名)、薬剤師1名(AE)、管理栄養士1名〕 ※小児アレルギーエドゥケーター(AE)

図3 第43回ふくおか病院サマーキャンプの概要

2) 第43回ふくおか病院サマーキャンプ学生リーダーの所属〔図4〕

第43回 ふくおか病院サマーキャンプ学生リーダーの所属(N=26名)は、看護大学Aが13名、看護大学Bが3名、看護学校Cが3名、第一薬科大学が3名(1名欠席で、実際の参加者は2名)、鍼灸マッサージ専門学校・教育学部・法学部・その他が各1名であった〔図4〕。

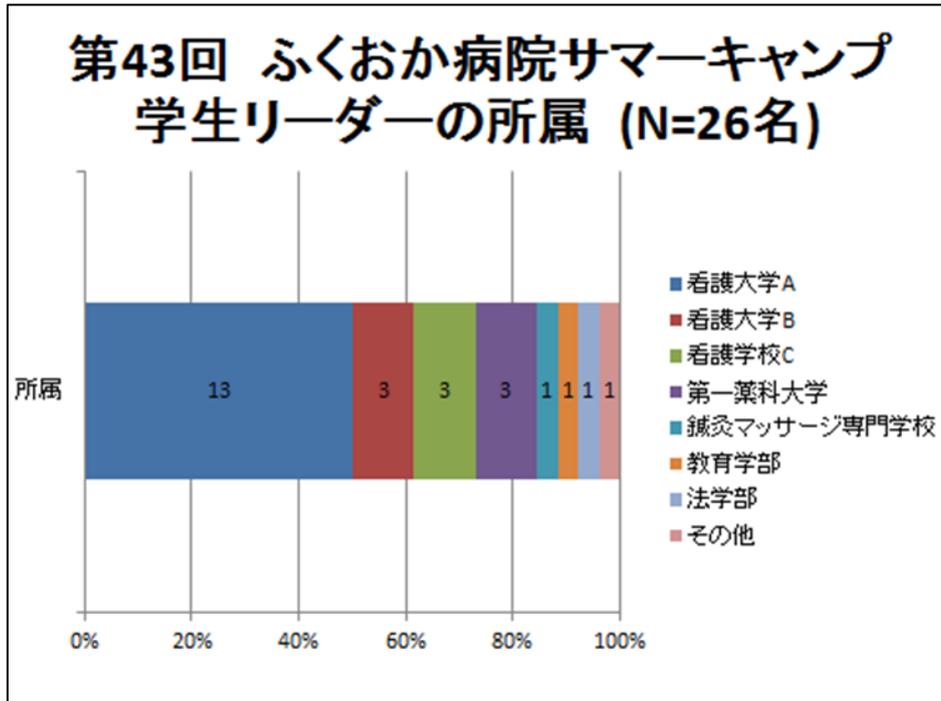


図4 第43回ふくおか病院サマーキャンプ学生リーダーの所属 (N=26名)

3) 目的別カリキュラムの内容 [図5]

キャンプにおいては、アレルギー疾患(ぜん息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー)の正しい理解を得る、症状の対応を身につける、自己管理ができるようになる、トレーニング療法の体験的会得、自立・自律心の獲得、という目的別に、各対応カリキュラムが設定されている [図5]。

学生リーダーのうち薬学生が担当したカリキュラムは、図5の下線部の項目にて示している。アレルギー教室のアレルギーコースにおいて、アレルギーについてのグループディスカッション、ぜん息発作の対処方法(腹式呼吸、排痰)、1日の振り返り、体操・駆け足・縄跳びのトレーニング、フィールドビンゴといった班活動、スタッフミーティング参加(子どもに応じた関わりの検討)、個人票による児童の行動観察記録作成(医師による最終保護者面接(キャンプ中の生活の様子を伝える)資料として使用するため)、オリエンテーリング・肝試し・野外調理等を行った。

目的別カリキュラムの内容

- アレルギー疾患(ぜん息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー)の正しい理解を得る

【対応カリキュラム】

アレルギー教室(ぜん息コース・アレルギーコース)

アレルギークイズ

アレルギーについてのグループディスカッション

- 症状の対応を身につける

【対応カリキュラム】

アレルギー教室(ぜん息コース・アレルギーコース)

ぜん息発作の対処方法(腹式呼吸、排痰、吸入、内服)の指導

スキンケア指導

痒みの対処方法の指導

アナフィラキシー症状の対処方法(エピペン)の指導

実際に症状を起こした子どもと一緒に考える。

(第43回 ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり)

目的別カリキュラムの内容

- 自己管理ができるようになる

【対応カリキュラム】

アレルギー教室(ぜん息コース・アレルギーコース)

症状が出たときの対処方法の指導

症状を予防する方法の指導

治療薬の継続に関する支援

1日の振り返り

- トレーニング療法の体験的会得

【対応カリキュラム】

体操、駆け足、縄跳び、冷水シャワー

(第43回 ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり)

目的別カリキュラムの内容

- 自立・自律心の獲得

【対応カリキュラム】

班指導(班長、副班長)役割分担(係)

班活動(キャンドルサービス出し物、フィールドビンゴ)

表彰、作文による振り返り

間接的には、スタッフミーティングによる子どもに応じた

関わりの検討。

個人票による児童の行動観察記録をもとに医師より最終

保護者面接(キャンプ中の生活の様子を伝える)

- 症状の対応を身につける

【対応カリキュラム】

腕章作り、星物語、オリエンテーリング、肝試し、野外調理、

キャンプファイヤーなど (第43回 ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり)

図5 目的別カリキュラムの内容

(学生リーダーのうち薬学生が関与したカリキュラムは、下線部の項目。)

4) 担当カリキュラムの活動写真〔図6〕

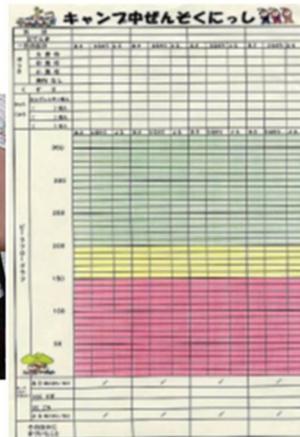
3) 目的別カリキュラムの内容のうち、学生リーダーのうち薬学生が担当したカリキュラムの活動写真の一部として、第1日目のアレルギー教室、トレーニング、第3日目の腹式呼吸、連日のピークフロー・グラフ、第4日目の集合写真を紹介する。



第3日目 腹式呼吸



連日 ピークフロー&グラフ



(第43回 ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり)

第4日目 集合写真



図6 サマーキャンプの活動写真

2 「アンケート調査」

1) アンケート調査の調査項目①～⑥の結果においては、キャンプ後の各調査項目の自己評価における理解有の割合(%)について、本調査の「実務実習中の薬学生(N=2)」と先行研究²⁾の「臨床実習前の医学生・看護学生(N=24)」との比較を行った〔図7〕。

調査項目	薬学生 (%)	医学生 看護学生 (%)
①小児喘息の基本的知識について		
鍛錬療法の重要性を理解できた。	100	100
喘息慢性管理の大切さが分かった。	100	42
腹式呼吸の重要性を認識した。	100	17
環境整備の重要性が分かった。	100	13
喘息の心理面の治療の大切さが分かった。	100	13
ピークフローメーターを使用することの意義が理解できた。	100	13
②検査、治療における基本的技能の習得について		
患児の吸入療法の時間的大変さを知った。	0	17
治療をする上で家族の協力の大切さが分かった。	100	17
実際の治療器具をみる事ができた。	100	4
吸入器の種類が多さを知ることができた。	100	4
吸入方法習得の指導の難しさを知った。	50	4
スプレーサー使用法の指導の難しさを知った。	50	4
③基本的態度の学習について		
患児、その母親、医療スタッフと接することで病気全体の体験学習が有意義であった。	100	88
思いやりのある医療の大切さを実感できた。	100	71
医療現場の大変さを知ると同時に医療のやりがいを感じた。	100	58
治療をする上で患児の母親との会話が重要であることが分かった。	100	13
患児との信頼関係の構築が必要であることを感じた。	100	4
④成長発達を理解について		
喘息児の前に1人の子供であることを認識できた。	100	21
患児との接し方を学ぶことができた。	100	13
患児と接する不安が解消した。	0	8
学童の成長発達における年齢差を感じた。	100	4
⑤患児とその家族を含めた包括的医療における医療チーム活動の協調的態勢について		
患児を取り巻く医療スタッフとの連携の重要性が分かった。	100	63
教師、友達などの啓蒙の必要性を感じた。	100	4
⑥大学講義や実務実習へのモチベーションについて		
大学講義や実務実習へのモチベーションが向上した。	100	13
(※医学生・看護学生への調査項目は、⑥その他「喘息の授業を早く聞きたくなった。」であったが、講義等へのモチベーションとして代用した。)		

図7 キャンプ後の各調査項目の自己評価における理解有の割合(%)についての「実務実習中の薬学生(N=2)」と「臨床実習前の医学生・看護学生(N=24)」との比較

2) アンケート調査の調査項目⑦：自由記述(原文そのまま)

【学生A】

子供達と生活における、すべての行動を共にすることにより、アレルギー患児に対する生活指導を身を持って学ぶことが出来ました。また、親元を離れて同世代の子供達と共同生活を行うことで、日に日に子供達の自立心や協調性が養われていることを目の当たりにすることが出来、自分自身も医療人となり、子供達の力になりたいという意欲がわきました。

【学生B】

キャンプという親と離れた環境で子供の自立心を身につけさせると共に成長を感じ取ることが出来ました。一つの班に各学年を配置することで、上級生が下級生に対し指導し互いに疾患や治療、検査に対する理解を深めていきました。子供たちに対してどこまで介入してよいかの判断は難しかったけれども、個々の発達度に合わせて指導することに関してはいい経験になったと思います。

考察

1. 「アンケート調査」結果についての考察

「アンケート調査」結果について、1)薬学生と医学生・看護学生ともに自己評価が高かった調査項目、2)薬学生が、医学生・看護学生と比較して自己評価が高かった調査項目、3)薬学生が、医学生・看護学生と比較して自己評価が低かった調査項目に分けて、考察した。

1) 薬学生と医学生・看護学生ともに自己評価が高かった調査項目について

調査項目①「小児喘息の基本的知識」における「鍛錬療法の重要性を理解できた。」は、薬学生(100%)、医学生・看護学生(100%)であり、両学生にとって学年を問わず取り組みやすい内容と考えられ、キャンプという生活の場で、患児や医療スタッフとともに実際に学んだ効果と考えられた。

調査項目③「基本的態度の学習」においては、「患児、その母親、医療スタッフと接することで病気全体の体験学習が有意義であった。(薬学生100% vs. 医学生・看護学生88%)」、「思いやりのある医療の大切さを実感できた。(薬学生100% vs. 医学生・看護学生71%)」、「医療現場の大変さを知ると同時に医療のやりがいを感じた。(薬学生100% vs. 医学生・看護学生58%)」であった。これらのことより、「基本的態度の学習」は、医学生・看護学生にとって、自己評価が高い項目が多く、これらの学習内容は、特に臨床実習前の学生にも学習効果が高いと考えられた。

調査項目⑤「患児とその家族を含めた包括的医療における医療チーム活動の協調的態度」における「患児を取り巻く医療スタッフとの連携の重要性が分かった。」は、薬学生(100%)、医学生・看護学生(63%)であり、小児アレルギーでのスキルミックス(職種協働)⁴⁾によるチーム医療を学ぶ上で、キャンプ体験学習は、両学生にとっても有用であると考えられた。

2) 薬学生が、医学生・看護学生と比較して自己評価が高かった調査項目について

調査項目②「検査、治療における基本的技能の習得」においては、「実際の治療器具をみることができた。(薬学生100% vs. 医学生・看護学生4%)」、「吸入器の種類

多さを知ることができた。(薬学生 100% vs. 医学生・看護学生 4%)」、調査項目③「基本的態度の学習」における「患児との信頼関係の構築が必要であることを感じた。(薬学生 100% vs. 医学生・看護学生 4%)」、調査項目④「成長発達の理解」における「学童の成長発達における年齢差を感じた。(薬学生 100% vs. 医学生・看護学生 4%)」、調査項目⑤「患児とその家族を含めた包括的医療における医療チーム活動の協調的態度」における「教師、友人などの啓蒙の必要性を感じた。(薬学生 100% vs. 医学生・看護学生 4%)」であった。これらのことより、薬学生においては、薬局での服薬指導や患者応対の実務実習での経験が役立ったと考えられた。

調査項目⑥「大学講義や実務実習へのモチベーションについて」においては、「大学講義や実務実習へのモチベーションが向上した。(薬学生 100% vs. 医学生・看護学生 13%)」であり、薬学生においては、実務実習で臨床を経験しているため、臨床実習前の医学生・看護学生よりも、キャンプ体験学習における影響が大きかったと考えられた。キャンプの意義は患者教育、セルフケア、またそれを可能にするパーソナリティ育成であり、たとえ治療薬が進歩しても、それだけでは達成し得ない自己管理方法を獲得する場となり得るといえ⁴⁾、そのような場に学生リーダーとして参加したことは、児童の成長のみならず、自己の成長にもつながり、その後の実務実習や講義へのモチベーションが向上したと考えられた。また、ボランティアとして、2年以上の参加経験者が何人か入るようにより依頼するとスタッフとしてのまとまりにもつながること⁵⁾より、今後も本学学生が積極的に継続してサマーキャンプに参加することによる効果も期待したい。

3) 薬学生が、医学生・看護学生と比較して自己評価が低かった調査項目について

調査項目②「検査、治療における基本的技能の習得」においては、「患児の吸入療法の時間的大変さ(薬学生 0% vs. 医学生・看護学生 17%)」、調査項目④「成長発達の理解」においては、「患児と接する不安の解消(薬学生 0% vs. 医学生・看護学生 8%)」であった。これらは、キャンプのタイトなスケジュールの中で、医療スタッフの業務の大変さを、実務実習での経験と合わせて、認識したためと考えられた。また、キャンプでは、アレルギー症状の場面に出会ったため、そのような場面での不安感が残ったものと考えられた。

4) 自由記述について

調査項目⑦の自由記述より、体験学習を通して子供の成長を感じ、小児医療へのモチベーション向上や介入の難しさ等を知ったことが分かった。これは、キャンプ療法という形での体験学習が、介入の困難性を感じながらも、アレルギー児への理解を深め、モチベーション向上に寄与したものと考えられた。

5) 本研究の限界

本研究においては、キャンプ後の自己評価のみであったので、キャンプ前後の比較が出来なかった。また本研究において、比較に用いた先行研究では、喘息児のみ対象のキャンプとなっており、本研究のアレルギー対象児とはキャンプでの体験プログラムの内容に相違がある可能性も考えられた。さらに、本研究における参加学生は、実務実習(臨床実習)中、先行研究は、臨床実習前であり、学部間の相違のみならず専門課程のどのステージの学習に及んでいるかも、結果に影響があったかもしれない。

今後の課題として、キャンプ体験学習の教育的効果の検討にあたっては、参加学生には参加前後でアンケート調査を実施したり、キャンプ参加のスタッフからの客観的な評価を得たりする必要があると考えられる。また学生の参加者だけではなく、医療従事者の参加者の職能間(医師、薬剤師、看護師等)に注目したり、アレルギーエデュケーター³⁾の資格の有無についても、調査を実施すると、小児アレルギーでのスキルミックス(職種協働)によるチーム医療について考える上で有用な示唆が得られるかもしれない。

2. サマーキャンプ体験学習によるサービス・ラーニングについて

「平成 26 年度 アレルギー児対象サマーキャンプ教育スタッフ養成研修」が、平成 26 年 7 月 19 日(土)～20 日(日)に、独立行政法人国立病院機構福岡病院にて、対象として、①看護師・保健師・栄養士または医療機関においてアレルギー疾患児、家族の指導に従事するコメディカルスタッフ、②サマーキャンプ運営に携わり、サマーキャンプ中にアレルギー疾患児の指導に従事する社会人に開催された〔資料 2〕。なお当研修は、サマーキャンプグループリーダーとして参加を申し込む学生は希望により講習を聴講でき、初回参加の病院内スタッフは必修とされている。

本サマーキャンプ参加の学生リーダーは、翌年度の当該研修にて、サマーキャンプ教育スタッフに対して、卒論報告「薬学生におけるアレルギー児童キャンプ体験学習の参加報告および教育的効果の検討—第 43 回 ふくおか病院サマーキャンプ—」を行った。実際にキャンプ参加の体験学習によって得たことを、その後の実務実習等へのモチベーションにつなげ、大学に戻ってからは卒論という形で深め、さらに翌年のサマーキャンプ教育スタッフへフィードバック出来たことは、キャンプ参加学生が早期に就職活動を終えていることから、学生自身の将来の進路を考えたり、自らの社会的役割を意識する上で、有用であったと考えられた。

文部科学省によると、サービス・ラーニングとは、教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラムであり、サービス・ラーニングの導入は、①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上、などの効果が期待できる、と言われている⁶⁾。本サマーキャンプ体験学習についても、薬学生におけるサービス・ラーニングの効果が期待できると考えられた。

結論

アレルギー児童キャンプ体験学習については、実務実習 I 期終了後に参加した薬学生においても、検査、治療における基本的技能の習得や成長発達の理解について、自己評価がやや低いものの、概ね高い自己評価が得られ、先行研究²⁾の臨床実習前の医学生・看護学生での結果と同様に、体験学習によって小児医療に対するモチベーションが高められ、教育的効果が得られたことが示唆された。

謝辞

本研究に、資料・写真提供等、ご協力いただきました国立病院機構福岡病院小児科医師・本村知華子先生(第43回ふくおか病院サマーキャンプ病院スタッフ・総責任者)を始め、すべての皆様に深謝いたします。

引用文献

- 1) 国立病院機構福岡病院, 第43回ふくおか病院サマーキャンプスタッフのしおり
- 2) 吉原重美ほか, 臨床実習前の医学生・看護学生における喘息児キャンプ体験学習の教育的効果, 医学教育, 32(1), 39-45(2001)
- 3) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会, エducーター制度, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会認定「小児アレルギーエデュケーター」制度
<http://jspiaad.kenkyuukai.jp/special/index.asp?id=7248>
- 4) 末廣豊, 小児アレルギー診療 コメディカルとともに, 診断と治療社, 東京, 2012
- 5) 小田嶋博, 【小児慢性疾患の生活指導-最新の知見から-】 慢性疾患の対応と支援・連携 小児喘息サマーキャンプ, 小児科臨床, 65(4), 599-607(2012)
(2014年12月31日アクセス可能)
- 6) 文部科学省, 用語集, サービス・ラーニング
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
(2014年12月31日アクセス可能)

付属資料

資料1 「第43回 ふくおか病院サマーキャンプ」グループリーダー募集のお知らせ

第43回 ふくおか病院サマーキャンプ グループリーダー募集のお知らせ



当院が行っているキャンプは、昨年度から、喘息だけでなく、アトピー性皮膚炎・食物アレルギーなどのアレルギー疾患にも対応しようと「ふくおか病院サマーキャンプ」に変わりました。

キャンプでは、共通の病気を持った子どもたちが、「苦しんでいるのは自分だけではない、仲間がいるのだからがんばっていこう」という気持ちで一緒に生活し、学び、レクリエーションを体験します。その際に元気でやる気のある方々に是非子どもたちとともに生活をするグループリーダーとしてご協力いただきたく思っています。

昨年参加されたグループリーダーさんの感想です。

- ・「子どもたちが目に見えて成長する姿にやりがいを感じ、嬉しく思いました。」
- ・「多くの元気や感動をもらうことが出来ました。」
- ・「今後の生活に生かせる貴重な体験ができて良かったです。」
- ・「看護師を目指す自分にとってスキルアップになりました。」

記

期 日：平成25年8月20日（火）～8月23日（金）

場 所：福岡県立英彦山青年の家（病院からバスで行きます。）

参加費用：無料（食事付き）

活動内容：8名くらいで構成されるグループのリーダーとして、子どもたちと生活を共にする。また、後日子どもたちと再会する場を持ち、キャンプ後の生活などについて振り返る。

募集人員：約12名（3泊4日宿泊可能な方）



※例年、男性の数が不足しております。男性はどしどしご応募下さい。また、必要人員を越える場合はお断りすることもあります。ご了承下さい。

募集期間：平成25年5月20日から6月14日（金）まで

申込み先：〒811-1394 福岡市南区屋形原4丁目39-1

独立行政法人国立病院機構 福岡病院

「ふくおか病院サマーキャンプグループリーダー係」

Tel：092-565-5534

Fax：092-566-0702

申込方法：別紙申込用紙もしくはホームページより申し込み用紙をダウンロードし、必要事項をご記入の上、郵送かFAXで申し込んで下さい。

ご協力いただく方には、6月下旬頃にこちらから連絡させていただきます。

*尚、ボランティアにご協力いただくにあたって、7月21日（日）10時30分から当院情報・研修センターで、事前説明会を行います。必ずご出席下さい。弁当持参をお願いします。どうしても参加出来ない場合は別の日に当院へ来て説明を聞いて頂くこととなりますのでご了承下さい。

資料2 「平成26年度 アレルギー児対象サマーキャンプ教育スタッフ養成研修」
プログラム

平成26年度 アレルギー児対象サマーキャンプ教育スタッフ養成研修

1) サマーキャンプ講習, 予診実習

日程: 平成26年7月19日(土)～20日(日)

場所: 福岡病院(福岡市南区星形原4-39-1)研修センターおよび外来棟

対象者: ①看護師・保健師・栄養士または医療機関においてアレルギー疾患児, 家族の指導に従事するコメディカルスタッフ

☆サマーキャンプグループリーダーとして参加を申し込む学生は希望により講習を聴講できます

☆初回参加の院内スタッフは必修とします。

②サマーキャンプ運営に携わり, サマーキャンプ中にアレルギー疾患児の指導に従事する社会人

費用: 無料

7月19日(土)

日時	講義テーマ	講師名
13:00	医療キャンプの中での福岡病院キャンプの特徴	本村知華子(医師)
13:15～14:00	患者教育のための基礎と実践① 気管支喘息	田嶋直彦(医師) 園崎佑佳(看護師)
14:00～15:45	患者教育のための基礎と実践② アトピー性皮膚炎	村上洋子(医師) 新田智大(看護師)
14:45～15:00	中休み	
15:00～16:00	患者教育のための基礎と実践③ 食物アレルギー	岩田実穂子(医師) 泉田純子(看護師) 松谷智子(栄養士)
16:00～16:20	子どものQOL調査	副枝真湖(看護師)
16:20～16:50	アレルギー児対象キャンプにおけるレクリエーションの意義	島添 充(看護師)
16:50～17:05	薬学生におけるアレルギー児童キャンプ体験学習の参加報告および教育的効果の検討(卒論報告)	第一薬科大学 高橋 沙季(学生リーダー)
17:10～17:50	予診ガイダンス	小宮有加(看護師)
18:00～19:00	意見交換(軽食)	